ISSN 1881-3496

九州大学
大学文書館ニュース

第45号　2022. 3. 31

目　　次

「常設展　九州大学の歴史」の開始……2
「吉岡文庫」の紹介……4
九州大学大学文書館委員会名簿……8
九州大学大学文書館名簿……8
大学文書館日誌抄録……9

「卒業を祝って」（1935年２月17日）

1925年に九州帝国大学最初の女子学生が法文学部に入学して以降、少数ではあるが女子学生が受け入れられていった。この写真は1935年２月に、法文学部に所属していた女子学生が、３名の先輩（文科２名、法科１名）の卒業を祝って集まった際に撮影された写真である。場所は法文学部本館の正面玄関前の広場で、左に法文学部本館、その隣奥に附属図書館、右奥には工学部本館を確認できる。留学生を含めた当時の女子学生の様子をうかがい知ることができる貴重な一枚である。

「常設展　九州大学の歴史」の開始

藤岡健太郎

2021年５月、椎木講堂において「常設展　九州大学の歴史」を開始した。本稿ではこの自校史常設展示について紹介したい。

九州大学大学文書館ではこれまで、学内各所において少なくない数の企画展示を行ってきた。しかし独自の展示スペースをもっていないため、常設展示は行ってこなかった。

そうしたなか、2020年２月に、伊都キャンパス椎木講堂で自校史の常設展示を行うことが提案され、これを大学文書館が引き受けることとなった。椎木講堂には「ギャラリー」と「展示スペース」という２つの展示空間が設けられているが、展示の開催が少なくなっていたため、その有効活用策として自校史常設展示が発案されたのである。

こうして大学文書館では展示の準備を開始することになったが、折からのコロナ禍によりその作業を阻まれることになってしまった。４月の緊急事態宣言発出後、６月までは休館を余儀なくされ、展示の準備に着手することすらできなかった。休館明けの６月末からようやく準備に取りかかれるようになり、９月に延期された開学記念式典にあわせて仮展示を行うこととしたが、開学記念式典がオンライン開催となったために仮展示も流れてしまう。

その後、2021年５月の開学記念式典にあわせて展示を開始することが決まり、ようやく本格的に準備に取りかかることとなった。まず５月にギャラリーで展示の前半部分の公開を先行して開始し、展示コーナーで展示する後半部分は10月に公開を開始する予定とした。

前半部分の展示は予定どおり５月の開学記念式典にあわせて開始することができたが、式典当日に列席者にのみ公開したあとは、感染者数が増加していたこともあり、しばらく非公開となった。その後学内限定で公開するようにしたが、広報などはしておらず、基幹教育総合科目「九州大学の歴史Ⅰ」の受講生の一部など、まだごく限られた人数しか観覧していない状況である。

後半部分については10月に公開を開始する予定であったが、諸事情により、本稿脱稿時点（2021年12月末）では2022年１月末に設営工事が完了することが決まっているのみで、いつから公開を開始するかについては未定という状況である。

ともかくも、本稿執筆時点では全体の構成や展示物の内容についてはほぼ決まっているので、以下紹介していきたい。

まず、全体の構成は以下のとおりである。

1　創立前史
2　九州帝国大学の創立
3　九州帝国大学の発展
4　戦時期の九州帝国大学
5　新制九州大学の発足
6　高度経済成長期の九州大学
7　改革の模索
8　学府・研究院制度の創設
9　国立大学法人九州大学の発足
10　伊都キャンパスへの統合移転
11　九州大学の学生生活

５までが前半部分で、６からが後半部分である。構成は基本的に時系列となっているが、11については、学生生活をまとめて展示する構成とした。これは、学生生活は各章の中にちりばめるよりも、長いスパンでの変化を見せる方が効果的ではないかと考えたためである。

次に、内容についてかいつまんで紹介すると、

章タイトル・解説サイン

展示の入口部分には九大の直接の前身である京都帝国大学福岡医科大学の初代学長・大森治豊の資料を展示し、正面に旧工科大学本館の建物模型と設計図面が見えるように配置する。

前半部分ではまず、アイキャッチとして旧工学部本館3階休憩室にあった金属製六角シャンデリアを置いた。「1 創立前史」では、九州大学の前身となる、賛生館に始まる福岡藩・福岡県の医育機関と福岡医科大学に関する資料を展示した。ここには福岡医科大学第2回卒業生で後に九州帝国大学医科大学教授となる小野寺直助旧蔵の「恩賜の銀時計」等が含まれている。「2 九州帝国大学の創立」では工科大学の創設と九州帝国大学創立期の資料を展示した。「3 九州帝国大学の発展」では農学部・法文学部の創設に加え、後に新制九州大学に包括される福岡高等学校の資料を展示した。またあわせて、孫文の揮毫など戦前期の国際交流を示す資料も置いている。「4 戦時期の九州帝国大学」では理学部の創設から学徒動員・学徒出陣までの資料を展示し、『九州帝国大学新聞』の最終号のパネルで締めるかたちにした。前半最後の「5 新制九州大学の発足」では、教育学部の創設など、新制大学が発足した時期の資料を展示している。

後半部分は本稿脱稿時点では未確定のところもあるが、「6 高度経済成長期の九州大学」では薬学部・歯学部の創設をはじめとする大学の拡張や、米軍機墜落事件を契機とする大学紛争に関する文書や写真等を展示する。「7 改革の模索」では紛争後の大学改革への動きから教養部の廃止までについて、「8 学府・研究院制度の創設」では大学院重点化から九大独自の制度である学府・研究院制度の創設までについて、「9 国立大学法人九州大学の発足」では新制大学発足以来の大きな画期である国立大学法人化と戦後の国際交流などについて、それぞれを最もよく示す文書・写真等を展示する。「10 伊都キャンパスへの統合移転」では伊都キャンパスへの統合移転について、病院キャンパスの再開発や共創学部の創設とあわせて展示することとしている。

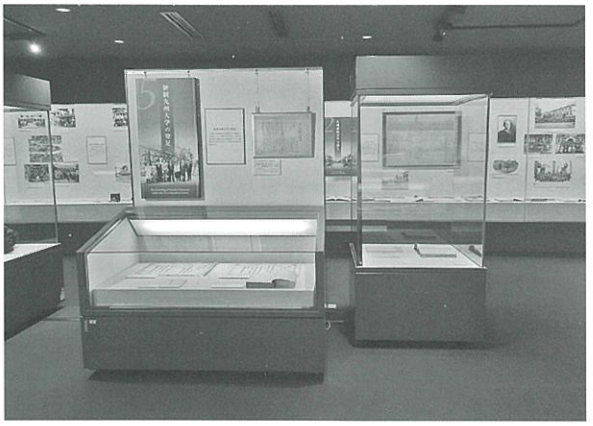
最後の「11 九州大学の学生生活」では、時期を3つに分けてそれぞれの特徴を表す文書資料、モノ資料、写真等を展示する。ここには1950年代終わりから2000年代初めに入学したほとんどの九大生が1・2年次に通った旧六本松キャンパスの模型も置いた。周囲の学生生活に関する展示とあわせて、同窓生が集った際などに往時を懐かしむことのできる空間とすることを意図している。

以上のようにこの展示は九州大学の歴史の全体像を示し、在学生、卒業生、教職員、受験生、他の研究機関や企業等からの来学者、九大周辺地域の方々といった多くの方々に九州大学に対する理解を深めていただくことを目的としている。また、学内にはほかに工学部の展示室やビッグオレンジ、総合研究博物館が運営するフジイギャラリーなどの展示施設があり、これらとあわせて観覧していただくことで、九州大学に対する理解はさらに深まることと考えている。

残念ながらおそらくこの『ニュース』刊行時点では、まだ制限のない公開を始めるに至っていないと思われる。一日も早くコロナ禍が終息し、多くの方々に展示を見ていただける日が来ることを願ってやまない。

（九州大学大学文書館副館長・教授）

3 九州帝国大学の発展



5 新制九州大学の発足

「吉岡文庫」の紹介

熊　谷　博　夫

九州大学大学院比較社会文化研究院の教授であった吉岡斉氏が2018年１月に63歳で早逝され、膨大な書籍・文書類、モバイルPCなどが遺った。九州大学大学文書館（以下文書館と略）はこれらの寄贈を受け、蔵書を配架する部屋と文書類を保管する部屋の２室を旧工学部本館２階に用意し、正式名称としてこのアーカイブスの性質をよく表す下記の日本語と英語が採用された。（以下吉岡文庫と略）

「九州大学大学文書館　吉岡斉科学技術史文庫」

Kyushu University Archives Hitoshi Yoshioka Collection
Social History of Science and Technology in Contemporary Japan

吉岡文庫の看板

現在、ボランティアと文書館スタッフとの共同作業により、蔵書の配架と目録の作成は完了し、さらに電子データ化された文書類の目録作成も目処が立ち、早急な公開に向けて準備をしている。本稿では、この間の取り組みと蔵書や文書類の概要を紹介する。

１．吉岡斉氏の略歴

吉岡斉氏は、1976年に東京大学理学部物理学科を出て大学院で科学史・科学基礎論を専攻し、その後和歌山大学の教員を経て、1988年に九大教養部科学史講座に移り2010年から５年間副学長も兼務された。科学技術史・科学技術社会学・科学政策の研究者として著作も多い。

特に日本の原子力政策については研究だけでなく、1997年から2015年にかけて多数の原子力・エネルギー関連の政府審議会委員を引き受けている。独特のユーモアで「反体制御用学者」と自称し、一貫して脱原子力の立場から発言された。2011年に起きた東京電力福島第一原子力発電所事故では政府事故調査・検証委員会の委員として１年かけて報告書の作成に尽力した。それ以降、2013年に民間シンクタンク「原子力市民委員会」の立ち上げに加わり、「脱原子力国家」への政策ロードマップ『原発ゼロ社会への道―市民が作る脱原子力政策大綱』を発表後、二代目座長として講演会や集会の開催、著作を通して積極的に政策提案活動をされているところであった。

２．大学文書館への寄贈の経緯

遺族から遺品の保存と整理を委託されたのは、吉岡氏の共同研究者である早稲田大学教授綾部広則氏と下関市立大学教授川野祐二氏たちである。綾部氏は九大在学中に吉岡氏の指導を受けた。

吉岡研究室を訪れたことのある方は、部屋中が書棚で埋め尽くされているのに驚いたことだろう。自宅も書籍・文書類が部屋中に山積みになっていて、整理する時間が限られていたのでアルバイトも頼み、とりあえず大型の箱400箱近くに詰め込んだそうである。

両氏は各々の大学での保管を検討したが書籍は量的に難しいと判断し、2019年１月頃に九州大学大学文書館への寄贈を打診した。当時の折田悦郎教授（現名誉教授）が吉岡氏の経歴と業績を鑑みてその歴史的価値を認め、書籍だけでなく一次資料である文書類も一括で引き受けることを決められた。早速、吉岡文庫を世界に向けて発信・公開するために、「吉岡斉関係資料整理プロジェクト（仮称）」を立ち上げた。書籍の整理や文書類の目録作りなどは、スタッフの人手不足により、当時文書館を利用していた数人を中心に、その都度募集して集まったボランティア総勢12人が担った。平均年齢は70歳前後である。

3．吉岡文庫の概要

まず送られてきたのは、およそ250箱にぎっしり入っている未分類の書籍であった。ざっと概算してみて8,000冊は下らないだろうと呆然とした。

次に２回に分けて文書類45箱、東京の自宅にあった書籍、46台のモバイルPC、講演を記録した電子ファイルなどを受け取った。ほとんどの文書類は綾部氏がテーマごとにまとめて整理した上で電子データ化してハードディスクに収めている。そのデータ容量は80GB以上あり、書類の枚数は10万枚を軽く超えているだろう。

吉岡文庫の整理風景

(1) 蔵書

およそ12,000冊の書籍は、氏が著作や論文等の参考用に収集したものが主で、文芸や趣味に関するものは少ない。氏の著作や論文掲載誌などは一つのラックにまとめた。それ以外は大まかに分類して表１のように配架している。また分類ごとの冊数の概数も示す。蔵書の分類・配架はボランティアが行い、目録は文書館スタッフの大谷荘平氏と川畑由美氏が作成した。蔵書目録は別冊として文書館から発行する計画がある。

女性が執筆した書籍を集めて、特にジェンダーとして分類していることに異論があるかもしれないが、氏が女性の自立的な活動を尊重していたことを考慮した。氏の妻吉岡やよい氏も公衆栄養学研究者であり、夫妻の共著論文もある。

参考までに作業工程を簡単に記す。最初、書籍の種類も数も不明なので、部分的に作られてあった数百冊のリストとランダムに取り出した書籍数百冊から大分類での比率を割り出し、棚の配置を決めて並べていった。これには毎週２日の作業を２人で３ヶ月かかり、延べ150時間余りを要した。はじめに用意した書棚には入りきらず数連追加し、さらに細かく再配架するのに４人が毎週１日集まりおよそ半年で延べ200時間余りかかった。

これら書籍の大半は今でも図書館で閲覧したり市中で購入できるだろうが、各分野の外観を直接手に取って閲覧・比較できることは、利用者にとって得難いものであろう。相当数の本に○や×だけでなく率直な評価の書き込みなどがあって興味深い。重複本が数百冊あったが、書き込みがあるものを選んでいる。

氏の専用ラックには、寄稿論文が載っている雑誌・機関誌なども、掲載の頃の雰囲気がよくわかるように当該ページに付箋をつけて並べており、原発事故に関する報告書や、原子力市民委員会のパンフレットももちろん配架している。氏は多数の科学者・技術者と共に、現代日本の科学技術の社会史を分析し『通史 日本の科学技術1945年～1995年』、『新通史 日本の科学技術 世紀転換期の社会史 1995年～2011年』をまとめられた。文庫にはこれら全12巻が揃っている。さらに続いて、『新通史2020』の共同研究を進めておられるところだった。

収集された書籍類を見ると、研究分野の広がりを見事に反映している。氏には、科学技術社会論の専門家というからには、現代科学技術の現状や

分　類	冊数
吉岡著作	280
科学技術論	1,100
原水爆・原子力発電	1,500
エネルギー・環境	300
工業・情報	1,200
自然科学	700
医療・食料	700

分　類	冊数
核兵器・軍事	700
政治・経済	800
大学・教育・哲学・文化・社会	500
ジェンダー	200
年鑑・白書・事典	400
雑誌・機関誌	2,600
趣味・実用書	200

表１．蔵書分類

その社会的役割について問われたときは何であれ意見を述べることができなければならない、という自負があるようだ。

原子力関連の書籍では、原子力発電の専門書から原発推進派・反原発派・脱原発派の主張や住民運動の記録まで細かく揃えているのはもちろん、原子核エネルギーの利用のもう一面である原水爆兵器などの軍事関連も、密かな軍事マニアかと思われそうなぐらいある。さらには情報通信工学・航空工学・宇宙工学まで関心がつながっている。「広島市核兵器攻撃被害想定専門部会」の委員も引き受けられており、原爆・水爆の被害調査資料などが揃っている。

不思議だったことの一つに、人工透析関係の書籍が多いことがあった。やよい夫人が腎臓を悪くされていて、2人で人工透析に関する科学社会学的分析を行い、共著論文を書かれていることを知った。氏は、2001年から九大で「医療倫理学」の講義も行っている。医療問題や感染症関連の書籍類を見ると、現在のCOVID-19によるパンデミック状況についてはどんな論評をされただろうか、と思ってしまう。

(2) 文書

文書箱には、テーマごとに書類が分類されてフォルダーごとに入れてあるが、中には紐で束ねたり、封筒に入れたままのものもある。この整理は、雑然と残されていたものを綾部氏が一人で仕事の合間を縫って少しずつ行われたもので、時間的制約もあり順序よくは揃えられていない場合もある。書類は1枚ずつスキャンしPDFに変換して電子データ化されているので、紙書類を直接扱わずにすむという大きな利点がある。

これらの電子データを基にした目録作成は、ボランティアのチームが受け持っている。まず、文書の電子データをざっと見て、各箱ごとの主要なテーマの概要一覧表を作成した。次に、いろいろなアーカイブスを参考に、目録のフォーマットを次のように14項目に分類した。「箱番号、分類番号、表題、内容、著者、作成・発行、巻・号、文書分類、点数、頁数、年・月・日、備考」である。これらを基に目録作成マニュアルを作り、分担者はExcelを用いて箱単位で目録作成作業をしている。一箱の目録作成に要する時間は平均20～30時間で、一人2～4箱ぐらいを目標にした。紙の書類と違って電子データなので、自宅でPCに向かって作業ができる。

長丁場でのモチベーションが落ちないように毎週1回定期的に集まって、情報交換しながらの共同作業もできるように、作業室が用意されている。ボランティアは延べ9人で、後半には、数名の学生アルバイトにも手伝ってもらえるようになって、大いに作業が捗っている。

各資料の「表題」や「内容」の書き方は、ある程度の共通了解のもとで各分担者の裁量に委ねている。内容によっては細かな分類が必要な場合もあり、1箱で1,000行以上になっていることもある。資料の検索は、目録の全文検索を利用して目的のデータファイルを集めるのが簡単である。

現在、個人資料の入っている箱以外はほとんど目録作成が終了し、数箱のみが作業中だがそろそろ出来上がりそうである。しかし、フォーマットや見落としのチェックなどがまだまだ必要である。

氏が委員であった多数の政府審議会と民間団体を表2に示す。これらについては、議事録や配布された参考資料などが全部揃っている。政府審議

原子力委員会 （総理府、内閣府）	高速増殖炉懇談会（1997年）
	長期計画策定会議（1999～2000年）
	新計画策定会議（2004～2005年）
	市民参加懇談会（2001～2009年）
総合資源エネルギー調査会 （経済産業省）	基本計画部会（2003年）
	需給部会（2004～2005年）
	原子力小委員会（2014～2015年）
内閣官房	東電福島原発事故調査・検証委員会（政府事故調）（2011～2012年）
	原子力委員会見直しのための有識者会議（2012年）
	国会・政府事故調提言フォローアップ有識者会議（2012～2013年）
民間団体	高木仁三郎市民科学基金（2001～2017年）
	原子力市民委員会（2013～2017年）

表2．政府審議会・民間団体

会では、数百ページもある資料が事前に送られてきて、会議は朝早くから２時間ぐらい毎月１回、１年近く行われているものもある。このような無理な日程でも、必ず毎回意見書を提出し、厳しい発言をしている。

氏が初めて審議会委員として高速増殖炉懇談会に参加されたのは、原子力情報室の高木仁三郎氏の推薦であった。第１回の議事録を見ると座長の決め方に異議を唱え、議事録の詳細な公開を要求している。報告をまとめる段階では、推進派の意見ばかりに業を煮やして、報告書には自分の反対意見を付記させている。その経過を見てこられたやよい夫人が季刊誌『科学・社会・人間』に傍聴記を投稿されている。

「高木仁三郎市民科学基金」では、高木氏の遺志を汲んで市民や学生たちの研究に資金援助をしており、吉岡氏は2001年の設立時から選考委員だった。申請書を全て保管されており、毎年数十人の広い分野の全てに目を通して評価コメントがつけてある。

氏は高木氏の後継者を自認し、彼の「原発問題の中にはすべてがある」をモットーに、講演を頼まれれば小さな集会でも出かけて行き、政府の原発政策について「過保護から介護へ」など独特の比喩で語る。水俣病に関するシンポジウムでは「原子力学の知恵を水俣学にどう生かすか」と報告している。講演を文字起こししたリーフレットも結構ある。マスコミには、インタビューや時評の依頼に丁寧に対応しているのが、大量のスクラップからわかる。2011年は驚くほど集中している。講演やインタビューなどを記録した約30本のビデオテープを、綾部氏がmp4の電子ファイルにしているので、淡々としているが諧謔にあふれた話術の吉岡氏に会うことができる。

著書『原子力の社会史』には、引用文献はほとんど記載されていない。しかし、それに関する資料は多数集められているので対応する文献を探すことができ、その評価について議論できるだろう。「機密書類」のようなものがないかも興味がある。戦後すぐGHQが、日本の原爆開発の実情を調査した101ページのTOP SECRET書類がある。開発責任者だった仁科芳雄氏が1945年秋にマッカーサー元帥に、加速器サイクロトロンの使用許可願いの手紙を出したが、結局破壊された。この経緯など先の著書に10ページにわたり細かく記述されている。1956年ごろの日米原子力協定をめぐる極秘のついた外務省資料は、50年経って機密解除されたのであろう。書記官の崩し字で書かれた文書の解読に担当者は頭を抱えていた。2011年の福島第一原発事故では、当時の政府関係者から個人的に相談を受けた記録もあった。

科学者運動については、戦前からの資料を含めて多数収集されている。広重徹氏が遺した資料も１箱あり、武谷理論に関する自筆のノートや1960年前後の素粒子・原子核研究所設立をめぐる種々の会議の議事録や資料が詰まっている。また、1966年開催の半導体国際会議への米軍資金導入に対する反対運動から、1967年日本物理学会総会での決議３「一切の軍隊からの援助や協力関係を持たない」という決定に至るまでの多数の資料が、当時の関係者から提供されている。

日本の科学技術の通史・新通史を出版するにあたって、各執筆者による草稿段階からのレジュメや原稿がほぼ残っているので、編集過程を追うことができる。氏は編集責任者としてテーマを提案し、執筆方針を決め、議論のための合宿やフォーラムを催してと、共同研究のオーガナイザーの手本を示している。また、いろいろな分野の研究者とやり取りした手紙も多数残っている。

大学での講義に関して、科学技術論・科学社会学・技術史・原子力発電などのいろいろなバージョンの講義ノートがある。それも使いながら、新聞記者などマスコミ関係者へのレクチャーもしていたようだ。

学生時代からの手帳が42冊、1972～2013年分がある。スケジュールが細かく書かれていて、簡単な日記がわりにもなっている。びっしり書かれた講演の下書き、研究計画や執筆計画なども活動を知る参考になる。氏の独特の走り書きには読むのに苦労する。

４．まとめ

資料整理の過程で気がついた範囲でいくつか紹介してきたが、文書箱の全貌は吉岡氏本人も掴めていないぐらいの量であり、書籍もそうかもしれない。積極的にこれらの箱を開けて、現代日本の科学技術と社会の関係に関する新たな分析の契機になることを期待したい。

この７ヶ月、延べ1,400時間に及ぶ作業に協力している人たちは、九大関係者を含む市民ボランティアの総勢12名で、川本光治、坂本紘二、深見康子、江藤俊一、木村京子、熊谷博夫、三上幸子、山中陽子、小柳修一、熊元啓人、堤静雄、熊谷憲一（敬称略）の諸氏である。全員何らかの形での

社会活動への参加が共通基盤である。この作業を通じて、たくさんの話題を共有しながら、自らの歴史を省みる機会を持つことができた。この紹介記事もそれらを反映していることを望んでいる。

今も大学文書館には次々と資料が持ち込まれている。人手不足や資金不足でなかなか整理が進まない現状を見ると、一案として、市民ボランティアを募って「文書館サポート市民委員会」を作り、クラウドファンディングも利用して、文書の整理や目録作り、WEBでの公開などに協力できるような体制ができれば、文書館はもっと知られて利用しやすくならないだろうか。

本稿の執筆に際し、ボランティアの皆さん、文書館の藤岡健太郎教授、赤司友徳准教授、そしてスタッフの皆さんのご協力に感謝します。

（元福岡工業大学教授）

九州大学大学文書館委員会名簿

委員長	副学長	教授	久保　智之
委員	文書館	教授	藤岡健太郎
〃	〃	准教授	赤司　友徳
〃	比文院	教授	中野　等
〃	法院	教授	熊野　直樹
〃	博物館	教授	三島美佐子
〃	韓セ	教授	永島　広紀
〃	人文院	講師	国分　航士
〃	総務部総務課	課長	亀井　肇
〃	法院	准教授	中島　琢磨
委員	数理院	准教授	佐藤　康彦
〃	芸工院	准教授	福島　綾子
〃	歯院	教授	前田　英史
〃	比文院	准教授	倉方　健作
〃	応力研	准教授	山本　勝
〃	生物環境	教授	吉田　敏
〃	博物館	館長	宮本　一夫
〃	総務部	部長	井上　賢一
〃	理学部等	事務部長	松尾　純
〃	図書館	事務部長	瓜生　照久

（2022年１月１日現在）

九州大学大学文書館名簿

館長	副学長	教授	久保　智之
副館長	文書館	教授	藤岡健太郎
専任教員	〃	准教授	赤司　友徳
兼任教員	比文院	教授	中野　等
〃	法院	教授	熊野　直樹
〃	博物館	教授	三島美佐子
〃	韓セ	教授	永島　広紀
〃	人文院	講師	国分　航士
協力研究員	九州大学名誉教授		東定　宣昌
〃	長崎大学名誉教授		柴多　一雄
〃	九州大学名誉教授		柴田　篤
〃	福岡市博物館総館長		有馬　學
〃	九州大学名誉教授		折田　悦郎
〃	九州大学名誉教授		後小路雅弘
〃	西日本新聞社		大西　直人
協力研究員	東京大学教養学部教授		山口　輝臣
〃	熊本学園大学商学部講師		市原　猛志
〃	清水建設株式会社 技術研究所		松本　隆史
総務課長（法人文書資料室長）			亀井　肇
事務職員			江藤まゆみ
事務補佐員			川畑　由美
〃			中村　江里
〃			大谷　荘平
〃			江頭　実生
〃			椛嶋　佑太
〃			金丸　敏昭
〃			有田　陽子
〃			立石　聖一
〃			大庭　魁斗
テクニカルスタッフ	クウィーラ，ダーヴィト＝ドミニク		

（2022年１月１日現在）

大学文書館日誌抄録（2020年12月～2021年12月）

12.14（月）　元九大生協職員一行、資料調査のため来館（12月21日、2021年３月８日、15日、22日、29日、４月５日、12日、19日、26日、５月10日、７月12日、19日、26日、８月２日、10月４日、11日、18日、25日、11月１日、８日、15日、29日、12月6日、13日も同様）。

12.16（水）　筑紫女学園大学講師、資料閲覧のため来館（2021年３月11日も同様）。

1.18（月）　九州大学理学部名誉教授、資料閲覧のため来館。

1.21（木）　国際部国際企画課より資料寄贈。

1.26（火）　法務・コンプライアンス課より資料閲覧のため来館。

1.28（木）　九州大学理学部名誉教授、資料閲覧のため来館。

2.1（月）　広島修道大学篠原新准教授より資料寄贈。

2.4（木）　九州大学文学部名誉教授、資料調査のため来館（８月５日、19日、９月２日、10月７日、18日、21日、27日、11月18日、12月２日、16日も同様）。

2.9（火）　Heart Mountain Wyoming Foundationに資料提供。
UR都市機構に資料提供。

2.25（木）　藤岡健太郎教授、大阪経済大学「大学史編纂を検討するための講演会」で講演。

3.3（水）　有限会社ゴッドキッズに資料提供。

3.4（木）　徳廣義男氏より資料寄贈。

3.12（金）　京都文教大学准教授、資料閲覧のため来館。

3.20（土）　奥田八二日記研究会開催（６月26日、９月10日、12月４日も同様）。

3.31（水）　理学部等事務部より資料移管。
『九州大学大学史料叢書』第27輯刊行。
『九州大学大学文書館ニュース』第44号刊行。

4.8（木）　九州大学医学部教授、資料閲覧のため来館。

4.12（月）　名古屋大学名誉教授、資料閲覧のため来館（10月25日も同様）。

4.14（水）　「大学とは何かⅠ」（基幹教育総合科目）開講（藤岡教授・赤司友徳准教授）。

4.15（木）　法務・コンプライアンス課に資料提供。

4.20（火）　文学部卒業生、資料閲覧のため来館。

4.21（水）　読売新聞記者、資料閲覧のため来館。

4.26（月）　静岡県立大学森山優教授より資料寄贈。

4.27（火）　農学部等事務部、学務部学生支援課、学務部キャリア・奨学支援課、研究・産学官連携推進課より資料移管。

5.6（木）　卒業生、資料閲覧のため来館。

5.11（火）　「常設展　九州大学の歴史」の公開を開始。

5.14（金）　大阪市立科学館に資料提供。
九州大学アドミッションセンターに資料提供。

5.31（月）　財務部財務企画課より資料移管。

6.10（木）　別府病院事務部より資料移管。

6.15（火）　九大フィルハーモニー・オーケストラより資料寄贈。

6.16（水）　「大学とは何かⅡ」（基幹教育総合科目）開講（藤岡教授）。

6.22（火）　藤岡教授、SNU-KYUSHU JOINT SYMPOSIUMのSession 6: Role and Function of University Forests: past, present and futureで報告。

6.24（木）　株式会社山川出版社に資料提供。
朝日新聞記者、取材のため来館。

6.30（水）　情報システム部情報企画課より資料閲覧のため来館。
柴田敏子事務補佐員退任。

7.1（木）　大学文書館委員会開催（書面回議）。
金丸敏昭事務補佐員就任。

7.2（金）　広島テレビ放送に資料提供。

7.9（金）　安松聖高氏より資料寄贈。

8.2（月）　立教大学助教、資料閲覧のため来館。
有限会社海鳥社に資料提供。

8.4（水）　一般財団法人西日本文化協会に資料提供。

8.16（月）　総務部同窓生・基金課より資料移管。

8.19（木）　農学部等事務部より資料移管（10月７日、13日、15日、11月16日も同様）。

9.6（月）　九州大学経済学部同窓会に資料提供。

9.7（火）　総務部総務課より資料移管。
9.8（水）　NHK記者、取材のため来館（13日、27日、10月4日、18日、25日も同様）。
学務部学務企画課、学務部入試課、財務部資産活用課、財務部決算課、財務部経理課、総務部地域連携課、企画部企画課、国際部国際企画課、国際部留学課、監査室より資料移管。
9.9（木）　情報システム部情報企画課より資料閲覧のため来館。
9.21（火）　農学部附属演習林より資料移管。
9.22（水）　柴田篤名誉教授、資料寄贈のため来館。
総合研究大学院大学客員研究員に資料提供。
9.28（火）　学務部基幹教育・共創学部課、学務部学生支援課、学務部キャリア・奨学支援課より資料移管。
10.1（金）　クウィーラ, ダーヴィト＝ドミニク、テクニカルスタッフ就任。
10.5（火）　「文書記録活動論」（ライブラリーサイエンス専攻）開講（赤司准教授）。
芸術工学部事務部より資料移管。
10.6（水）　成蹊大学図書館に資料提供。
工学部等事務部より資料移管。
10.8（金）　「文書記録サービス論」（ライブラリーサイエンス専攻）開講（藤岡教授）。
「九州大学の歴史Ⅰ」（基幹教育総合科目）開講（赤司准教授）。
10.12（火）　株式会社アースアプレイザル九州より資料閲覧のため来館（15日も同様）。
10.13（水）　附属図書館図書館企画課、研究・産学官連携推進部産学官連携企画課、情報システム部情報企画課、情報システム部情報基盤課、人事部人事企画課、人事部人事給与課より資料移管。
10.20（水）　人文社会科学系事務部より資料移管。
10.26（火）　雁の巣レクリエーションセンターに資料提供。
10.27（水）　農学部附属農場、財務部財務企画課より資料移管。
11.5（金）　農学部附属農場に資料提供。
11.9（火）　理学部等事務部より資料移管。
11.10（水）　筑紫地区事務部より資料移管。
11.22（月）　NHKディレクター、取材のため来館。
工学部卒業生、資料閲覧のため来館。
11.24（水）　藤岡教授、明治大学アジア留学生研究会で講演。
11.25（木）　医系事務部、病院地区事務部より資料移管。
大阪経済大学より大学文書館視察・資料閲覧のため来館。
11.27（土）　シンポジウム「情報管理組織のミッションと専門職養成」（九州大学大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻、九州西洋史学会主催）を共催。
12.10（金）　人文社会科学系事務部より資料寄贈。
「九州大学の歴史Ⅱ」（基幹教育総合科目）開講（藤岡教授）。
12.13（月）　秀村家より資料寄贈。
12.14（火）　施設部施設企画課に資料提供。
12.16（木）　辛坊正記氏より資料寄贈。
12.17（金）　秋山博志氏より資料寄贈。

九州大学大学文書館ニュース　第45号
Kyushu University Archives
発行日　2022年3月31日
編集
発行　九州大学大学文書館
〒812-8581 福岡市東区箱崎6－10－1
Tel:092-642-2292
印刷　株式会社ミドリ印刷